

< 2004年8月 >

「兵は凶器なり」(36) 15年戦争と新聞メディア 1935 - 1945

南京虐殺を「武士道の精華」と報道した新聞(上)

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

一九三七(昭和十二)年八月十三日、上海で陸戦隊の西部派遣隊の大山勇夫中尉と水兵一名が虹橋(こうきょう)飛行場付近で射殺された事件がきっかけで、日中両軍の間で戦闘が開始された。

これが第二次上海事変と呼ばれている。

当初、強力な中国の中央直系軍の拡大で、日本軍は苦戦を強いられ、松井石根上海派遣軍司令官の率いる「中支那方面軍司令部」が設置され、上海を包囲、やっと中国軍の優位に立った。

中国軍は総退却し、日本軍は猛追撃し、中国の首都南京を約四カ月で手中に収めた。

「東京朝日」、「東京日日」で、陥落までの軌跡を追うとー。

- ・12月3日 「南京今や指呼の間、敵の術策長期抵抗」(『東京日日』)
 - 5日 - 「南京包囲体勢完成し、皇軍勇躍・一挙攻略へ、戦局最後段階に入る」(『東京朝日』)
 - 6日 - 「南京攻略の態勢整ふ、一週間内に陥落せん、背後を衝かれ敵、続々移動」(『東京日日』)
 - 「嬉しや元旦の雑煮は南京で祝ほうぜ、進軍の軍靴も軽し、戦線の流行語、南京へあと何里」(『東京朝日』)
 - 同7日 - 「南京今や風前の燈火、皇軍入城刻々迫る 早くも上海に陥落説」(『東京朝日』)

そして、「南京陥落せまる」の報に国民が興奮、熱狂していく様子をこう伝えている。

「牙城南京陥落目前に迫るの快報は帝都六百万市民に非常な感激を与えているが東京府、市当局では祝大捷を協議した結果、南京陥落の場合、昼は全市民の旗行列、続いて戦勝奉告祈願祭、それから夜は提燈行列を挙行し、百万人の戦勝祝賀大衆行進により、帝都を旗と提燈の一色に塗りつぶそうと、今から興奮している」(『東京朝日』)

8日 - 「南京宛ら死都、残留市民僅かに数千、武器弾薬も全く欠乏」(『東京日日』)

「南京今や五里、陥落目前戒厳下、全市忽ち大混乱、敵軍対岸へ移動開始」(『東京日日』夕刊)

「きょうこそ世界歴史の一頁をかざる首都陥落を予想して、七日朝、帝都の祝勝気分は先ず銀座街頭から爆発した、(略)まだ陥落前から大きな賑を掲げた某カフェー、デパートの『歳暮大売出し』は鮮かに『祝勝大売出し』に転換、宮城前へ、靖国神社へ明治神宮へ喜びに満ちた小学生や国防婦人会員の列が続き、旗屋さんや提燈屋さんの大量準備も万事 OK！(略)
戦勝気分一色の浅草六区興行街の各常設館でも『只今南京陥落』のアナウンスの手筈を決め『祝南京陥落』の看板も出来上った」(『東京朝日』)

勝利に軍も国民も狂喜し、酔いしれていた。光輝たる皇軍に不名誉な虐殺などが行われていようとは、国民だれもが想像だにできなかった。新聞は景気よく、連戦連勝、向かうところ敵なしの皇軍の奮戦ぶりを連日、大々的に報道した。

同8日の『東京朝日』は、「蒋介石・つひに都落ち、燃ゆる南京・掠奪横行、敗戦、断末魔の形相」の見出しでこう書いている。

「南京にはわが航空隊が大空襲をなし、市内には諸所に火災を起し、人影殆ど絶え南京の大市街は廢墟の如く凄惨な光景を呈している。市中には少数の軍隊、憲兵が警戒に当たり、下関方面にも掠奪が行われ、支部軍常套手段の敗退の際における混乱が起こっている模様である」

蒋介石はすでに脱出しており、南京城にたどりついた日本軍は全軍が勢揃いするまで、待ったことになった。

『東日』はこの点を「南京入城に武士道精華、敵に情けの勸降状」と一頁をほぼ埋めつくす大々的記事に仕立てている。作戦上の単なる待機、勸告だけであるのに。

「敵都南京城は完全なる包囲態勢下に置かれ、その運命は全く掌中に歸した。しかし、南京は敵国ながら首都である。一挙に躁欄するはいと易いが、わが軍は特に武士道的見地に立って、まずわが国諸部隊の勢揃いをした上、威容を正して城内の敵に一応投降の勧告状を出すことになった」(『東京日日』 8日)

虐殺は武士道の精華なのか。

9日 - 「南京自滅の却火に包まる、我後続部隊続々集結、勇氣凜然、入城を待機」(『東京日日』夕刊)

10日 「皇軍、最後の投降勧告、けふ正午迄に回答要求、淳々南京敵將を諭す」

「敵の回答遂に来らず、皇軍・断乎攻略の火蓋、南京落城の運命迫る」(『東京朝日』)

11日 「祝・敵首都南京陥落、歴史に刻む輝く大捷、南京城門に日章旗」(『東京朝日』)

- 「皇軍勇躍南京へ入城、敵首都城頭に歴史的日章旗、猛烈なる市街戦を展開」(『東京日日』)



南京突入の一番乗りは脇坂部隊であった。

高い城壁で一大要塞と化している南京城の光華門に脇坂部隊は殺到、伊佐部隊、富士井、大野、岩仲、野田などの各部隊も10日夜に次々突入、激戦を繰り返した。

南京城を死守すべく、とどまっていた中国兵は約十万人。南京陥落で脱出した中国軍の多くは捕虜になり、この段階で抵抗した中国兵は推定で約五万人にのぼった。

写真は占領は同時に日本軍による暴虐として世界に伝わる(『東日』, 37年12月8日)

十二日 - 「南京城の敵軍全く袋の鼠、夜陰に乘じ長江渡河、烏江鎮を急襲占拠す」
(『東京日日』)

『東京日日』は「皇軍将兵に感謝す」の社説をこの日掲げた。

「疾風迅雷といおうか、電光石火といおうか、皇軍の南京攻略はまさに世界の驚嘆するところである。これはひとり皇軍の名誉であるばかりでなく、国民全体のほこりであるといわねばならぬ……即ち皇軍の功績が偉大であればあるだけ、皇軍の精神的労苦、肉体的困難もまた非常なものがあつたと想像されるのである。われ等はまずこの事実に対して、前線の将兵諸氏に深厚なる感謝の意を表せざるを得ない」

13日 - 「南京城内の敵総崩れ、南側城壁を全部占領、残敵掃蕩、凄壯を極む、皇軍の戦果益々拡大」(『東京日日』)

13日 - 「南京・南側全城壁に日章旗翻る、潮の如く城内へ殺到、凄絶・暗夜の大都市戦、敵の二個師全滅、凄愴！ “最後の姿”」(『東京朝日』)

『東京朝日』は十三日付の「占領地窮民の救済」と題する社説でこう主張した。

「戦地を視察して帰った人々の異口同音に語る重要話題の一つは、北支と上海付近とに論なく、我軍の占領地域内における支那住民の驚くべき困窮状態である。水害や干ばつの災いを受け、餓死するもの幾万なるを知らずという所もあり、その上、疫病、匪賊、内乱の犠牲となって倒れるもの等、年々幾十百万の多きに達し……。今目前飢餓に迫れる窮民数百万人の救済については新政権の樹立を待つまでもなく、日本としても即刻着手すべき緊急問題といわねばならぬ」

14日 - 「南京を完全占領、両三日後、歴史的入城式、砲煙赤く炸裂の中に、群うつ敗走兵の惨状」(『東京朝日』)

- 「けふぞ、南京城完全占領の日、東西南の各城門より、皇軍大部隊勇躍突入、包囲下に大蔵滅戦を展開」(『東京日日』夕刊)

15日 - 「街々に日章旗翻へり、南京の秩序回復、わが総領事館は無事、愈々迫る南京入城式、十七 - 八日頃行はれん」(『東京朝日』)

16日 「南京一帯掃蕩の戦果、敵六万を捕虜・撃滅す、皇軍なほ清掃を続く」(『東京朝日』)

朝日』夕刊)

「南京城を陥落させた皇軍各部隊は、それぞれ城の内外に集結、し一部を以て潜伏出沒する敗残兵の掃蕩及び、市内整理に當って居るが、この南京攻略戦でわが軍が捕虜とし、又は残滅した兵数は六万を下らぬと推察されている」

19日 - 「敵の遺棄死体八、九万(南京攻略の戦果)」(『東京日日』)

「上海軍発表 南京攻略に當り敵の遺棄せる死体は八、九万を下らず、捕虜数千を算す 略 軍のとくに憂慮せし山中陵、その他保護建築物及び物件等は、敵守備兵或は敗残兵等のため破壊せられ惨々たる状態を呈しあり」

17日、歴史的な南京入城が行われた。

『東朝』『東日』とも感極まり、齒の浮くような大々的な記事を一面の大部分をつぶして報じているが、これらの文章は新聞社でいうところの “予定稿” だったのである。

締め切り、送稿する時間が間に合わない場合は今でもそうだが、前日までに取材して、大体この通りであろうと想像し、不動の事実を混えながら予定稿を書いて送っておく。あとは、当日に違っていた事実だけを訂正していくという取材送稿上の一つの技術である。

しかし、予定稿はあくまで、事実ではなく、創作に近い部分が多い。見てないことを想像しながら書くのだから、特に南京虐殺のように新聞からは全く歴史のヤミの中に葬り去られた事実については、その差が余りにも大きく “虚報の最たるもの” との非難が戦後に起きた。

入城式の記事をみてみよう。

『東京朝日』は「この万歳・故国に轟け、威容堂々！大閱兵式」「世紀の絵巻・南京入城」。

『東京日日』は「青史に燐たり・南京入城式」「武勲の各隊・肅然堵列、松井大将堂々の閱兵」「空陸に展く、豪華絵巻」

いずれも十二月十八日の夕刊である。

「嗚呼感激のこの日、同胞一億の唱和も響け、今日南京城頭高く揚る万歳の轟きは世紀の驚異と歡喜玄に爆発する雄渾壮麗な大入城式である、この軍中支に聖戦の兵を進めて四ヶ月、輝く戦果に敵首都を攻略して全支を制圧し、東亜和平の基礎玄に定まって国民政府楼上に厨翻と翻る大日章旗を眺めては誰か感激の涙なきものがあるか。

莊嚴勇壯を極めるこの大入城式を目のあたりに実況を故国に伝える記者の筆も感激と興奮に震える、南京は日本晴れ、この日紺碧の空澄み渡って雲一つ浮ばず銃火玄に収まって新戦場に平和の曙光満ち渡る。……

午後一時半松井大将を先頭に朝香宮殿下を始め奉り 部隊長、各幕僚は騎乗にて、ここに歴史的な大入城式が開始された

ラッパが響き渡る、裂南の号令一下、『頭右ッ』、全将士捧銃の中を軍司令官の閲兵の列が行きすぎる部隊から各部隊長は各その幕僚を随えて閲兵の列に加わって行く、何という堂々の大進軍だ、

国民政府に閲兵の列が入る、此時下関に上陸した支那方面艦隊司令長官長谷川中将は各幕僚を随えてこれに加わる、午後二時、国民政府正門のセンター・ポール高く大日章旗が掲揚された、翻翻と全東洋の風をはらんでたはたと磨く日の丸の美しさ、海軍々楽隊の『君が代』が奏でられ始めた、

空に爆音を響かせて翼を連ねる陸海軍航空隊の大編隊、正門の中に閲兵を終った松井方面軍司令官、朝香宮殿下以下参列諸員が整列、東方遥皇居を拝し奉った松井軍司令官が渾身の感激を爆発させて絶叫する『天皇陛下万歳』の声、全将兵の唱和する万歳のとどろき、ここに敵首都南京がわが手中に帰したことを天下に宣する感激の一瞬である」(『東京朝日』)

南京入城式は十七日午後一時半から開始された。『朝日』は入城式の写真を大校場飛行場に待機した自社の幸風機で福岡支局上空まで3時間で飛び、フィルムを投下、即日号外写真として全国に配布した。幸風号は時速三百七十キロのスピード空輸に成功、大資本にものをいわせた速報体制を着々と築いていった。

一方『東京日日』(毎日)は -。

「支部事変勃発以来、聖戦六ヶ月、百六十余日の今日、十二月十七日、一億国民の感激を担いてここ敵の首都南京において有史以来曾てなき皇軍の“敵首都入城式”の盛典は挙げられた。……

君が代だ。国歌君が代だ。敵の首都に轟く君が代だ。その君が代吹奏裡にするすると正門の上に上る日章旗、さんたる日章旗、日章旗掲揚式がはじまったのだ。

日の丸の数はあれど、この日、この時の日の丸ほど意義深き日の丸がまたとあろうか。仰ぎ見る眼、眼、それは日本人としての感激に充ちた眼だ。涙にぬれた眼だ。日本人のみが本当に、この日の日章旗の意義を知る。冬の陽射しを受けて南京の空高く翻る日章旗、読者よ、その壮麗にも輝かしい情景を想像されよ……」

だが、こうした新聞の誇張された報道の裏で、中国のいう約30万人虐殺から、日本側の一部識者の4万人説までいろいろあるが、多数の中国軍兵士、敗残兵、掃虜、一般市民、老若男女、子供、幼児までが無差別に大量虐殺されたのである。(1)

『大義』の著書として有名な杉本五郎中佐は同書を一九三八年五月に刊行したが、その前年三七年九月に内蒙古で戦死した。『大義』は戦時中の軍人たちの座右の書になった古典だが、その中で伏字として知られていなかった部分に次の文章があったという。

「現在、大陸に居る皇軍は侵略軍であって皇軍ではない。暴行、略奪、強姦などほしのままにしているような軍隊は断じて皇軍ではない。……ただちに大陸より軍を撤退せよ」(2)

南京攻略には各社の従軍記者、大宅壮一らの作家ら約五十人近くが参加し、虐殺も目撃したはずだが、その大半が戦後になっても、真相を語っていない。

ただ、わずかだが、真相の一端を発表した記者もいた。

『東京日日』で南京作戦に従軍記者として参加した鈴木二郎はこう書いている。

「光華門につうじる道路の両側にえんえんとつづく散兵壕のみられるなかは、無数の焼けただれた死体でうめられ、道路に敷かれてたくさんの丸太の下にも、死体が敷かれていて腕、足の飛び出しているありさまは、まさにこの世の地獄である。その上を戦車は容赦なく、キャタピラの音をひびかせて走っているのを見て、死臭、硝煙の臭いと

ともに、焦熱地獄、血の池地獄に立つおもいがした」(3)

『朝日』の従軍記者・今井正剛は -。

「一面はまっ黒く折り重なった死体の山だ。その間をうろうろとうごめく人影が五十人、百人ばかり、ずるずるとその死体をひきずっては河の中へ投げこんでいる。うめき声、流れる血、けいれんする手足。しかも、パントマイムのような静寂……やがて作業を終えた“苦力たち”が河岸へ一列にならばされた。だだだっ機関銃の音。のぞけり、ひっくり返り、踊るようにしてその集団は河の中に落ちていった。その場にいたある将校は犠牲者の数を『約2万名ぐらい』と言ったという」

だが、こうした虐殺の事実は一切報道されず、皇軍の名誉、輝かしさばかりが誇大に報道された。

(つづく)

< 参考・引用文献 >

- (1) 『日本近代史の虚像と実像 3 南京大虐殺の真相』 笠原十九司 大月書店 1989年刊 154P
- (2) 『南京事件』 洞富雄 新人物往来社 一九七二年四月刊 188P
- (3) 『私はあの“南京の悲劇”を目撃した』 「丸」一九六一年十一月号